研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著， 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概　　要
(著書(欧文))				
(著書(和文))				
(学術論文(欧文)) 1. The role of illness schemata in self-care behaviors and glycemic control among patients with type 2 diabetes in Iran（査読付） イランの2型糖尿病患者におけるセルフケア行動と血糖コントロールに対する病認の役割	共著	2019年3月	Primary care diabetes Vol.13(5) (ｐ474～480)	イランの2型糖尿病患者の病識とセルフケア行動、血糖コントロールとの関連を調査した。その結果、病気を認識している患者群は食事、運動において規則正しい生活を営み血糖値もコントロールできていた。一方、病識が乏しい患者群ではアドヒアランスが低く、血糖値もコントロールできない状態であった。 共著者：Shibayama, T., Tanha, S., Abe, Y., Haginoya, H., Hidaka, K. 担当分担：データの分析を担当した。
(学術論文(和文)) 1. 県内看護学校の静脈内注射に関する教育の実態調査（査読付）	共著	2006年3月	茨城県看護教員連絡会誌 第10巻 (ｐ4～5)	2003年の看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会の報告から静脈内注射が看護師の業務として位置づけられたことを受けて、茨城県内にある看護学校における静脈内注射教育に関する実態調査を実施した。その結果、すべての看護学校において講義、演習は実施されていたものの卒業時点においての到達レベルに違いがみられた。今後の課題としては、県内の看護学校の教育レベルを可能な限り一定化させるとともに、卒業後は県内で就業する学生の割合が多いことから各病院のインターンシップ、院内教育にどのようにつなげていくかなどが挙げられた。 共著者：萩野谷浩美、広瀬礼子、鈴木おりえ 担当分担：研究計画作成、アンケート作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当した。
2. 心臓カテーテル検査後の安静臥床に伴う患者のストレス評価	単著	2009年7月	筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻	心臓カテーテル検査施行後に安静臥床を強いられた患者のストレス評価を明らかにするための研究である。安静臥床中のsAAは経時的に上昇し、安静解除によって有意に減少した($p<0.01$)。これらの結果から、sAAは患者のストレス評価に有用であることが示唆された。 ［看護科学修士論文］

3. ストレス評価における　唾液αアミラーゼ活性の有用性（査読付）	共著	2012年1月	日本看護技術学会誌第10巻3号（ｐ19～28）	ストレスの評価指標としての唾液αアミラーゼ活性(sAA)の有用性を明らかにするための研究である。健康な成人女性7名を対象に、暗算作業、足浴をそれぞれ10分間行った際のsAAの変化を心拍数、スキンコンダクタンス、Visual Analog Scaleの変化と比較検討した結果、暗算作業開始直後よりいずれの測定項目も有意に上昇し(p＜0.05)、sAAと各測定項目との間に相関があることが明らかとなった(rs=0.631～0.798)。sAAは、心拍数やスキンコンダクタンスなどの自律神経機能と同様に交感神経活動を反映しており、客観的にストレスを評価するための指標となりうると考えられた。 共著者：萩野谷浩美、佐伯由香 担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当した。
4. 大腿動脈・静脈を介して心臓カテーテル検査を受ける患者のストレス評価（査読付）	共著	2013年8月	日本看護技術学会誌第12巻2号（ｐ14～22）	大腿動脈・大腿静脈を介して心臓カテーテル検査が実施された患者9名(男性5名／女性4名、53～84歳)を対象に、検査前後における患者のストレスの程度を唾液αアミラーゼ活性および自律神経機能、Visual Analogue Scaleを用いて評価した。心臓カテーテル検査後の交感神経活動は、安静解除直前まで亢進し続け、安静解除に伴い低下することが明らかとなった。また、患者の主観的苦痛度も安静解除後に軽減することが示された。心臓カテーテル検査後の安静臥床時では患者のストレスが上昇することから、これを軽減するための援助が必要であると考えられる。 共著者：萩野谷浩美、佐伯由香 担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当した（修士論文の一部を加筆修正）。

5. 発達障害を有する子どもの「食」に関する実態調査（査読付）	共著	2018年1月	実践人間学 第8号 （p5～10）	発達障害を有する子どもの看護を実践している看護師52名を対象に、養育者から「食」に関してどのような相談があるのかを調べることを目的とし、アンケート調査を実施した。看護師が相談を受けた具体的内容は、「よく噛まない」（相談件数全体の64.5%）、「食べるのに時間がかかる」、「偏食」「遊び食い」「小食」などであった。発達障害の種類は、「特定不能の広汎性発達障害」、「自閉症スペクトラム症」と診断されている子どもが全体の71.2%であった。 共著者：本村美和、萩野谷浩美、日高紀久江 担当分担：アンケート作成および分析、論文執筆を担当した。
6. The role of illness schemata in self-care behaviors and glycemic control among patients with type 2 diabetes in Iran （査読付） イランの2型糖尿病患者におけるセルフケア行動と血糖コントロールに対する病認の役割	共著	2019年3月	Primary care diabetes Vol.13(5) （p474～480）	イランの2型糖尿病患者の病識とセルフケア行動、血糖コントロールとの関連を調査した。その結果、病気を認識している患者群は食事、運動において規則正しい生活を営み血糖値もコントロールできていた。一方、病識が乏しい患者群ではアドヒアランスが低く、血糖値もコントロールできない状態であった。 共著者：Shibayama, T., Tanha, S., Abe, Y., Haginoya, H., Hidaka, K. 担当分担：データの分析を担当した。
7. 「看護観」についての概念分析（査読付）	共著	2019年6月	看護教育研究学会誌 第11巻1号 （p15～24）	「看護観」について概念分析を目的とし文献検討を行った。466文献から「看護観」を追究している66文献を分析対象とした。分析の結果、属性は【看護に対する自己洞察】、【専門職業人としての行動指針】、先行要件は【自己の看護に対する俯瞰】、【患者との対峙】、【探求心の向上】、帰結は【看護の質の向上】、【職業的アイデンティティーの確立】であった。 共著者：萩野谷浩美、日高紀久江、森千鶴 担当分担：研究計画作成、文献検討、分析、論文執筆を主で担当した。
8. 遠隔看護技術を用いた摂食嚥下障害－リハビリテーション看護支援システムの構築－ （査読付）	共著	2021年5月	Medical Science Digest Vol.47(5) （p42～43）	在宅や施設における摂食嚥下障害者に対して遠隔看護技術を用いて摂食嚥下障害リハビリテーション看護の支援システムの構築を目的にそのシステムに欠かせないデバイス(嚥下音解析・評価システム)を開発した。 共著者：本村美和、岡田真、萩野谷浩美 担当分担：デバイスの評価を担当した。

9. 看護学生が捉えている看護観（査読付）	共著	2021年9月	Medicine and Biology Vol.161(3) （ｐ1～9)	看護学生が捉えている看護観を明らかにするために、看護系大学に在籍している学生9名(2～4年生)を対象にインタビュー調査を実施した。学生が捉えていた看護観は6つのカテゴリに分類できた。【自己中心ではいけない】【患者中心に考える】【専門職という自覚をもつ】は臨地実習において自己洞察をした結果語られた内容であり、【患者を心身ともに支える】【患者をエンパワーする】【患者の人生を考える】は看護専門職者としての役割を示していることと考えられた。 共著者：萩野谷浩美、日高紀久江、森千鶴 担当分担：研究計画作成、インタビューガイド作成、インタビュー、逐語録作成、分析、論文執筆を主で担当した。
10. 茨城県内の病院・介護保険施設における嚥下調整食提供に関する調査報告（査読付）	共著	2022年	日本摂食嚥下リハビリテーション学会誌 第26巻1号 （ｐ47～53)	本研究は、茨城県内の539施設(病院、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム)を対象に、摂食嚥下障害者に対する嚥下調整食の提供状況について調査を行った。嚥下調整食を提供している施設は全体の93.7%、そのうち機能回復に応じた食事段階を定めている施設は60.3%であった。機能の回復に応じた食事の提供については、2009年調査との比較において有意差は認められなかった。本調査において栄養士の84.2%が自らの摂食嚥下リハビリテーションに関する知識や経験が不足していると回答した。今後の課題としては摂食嚥下リハビリテーション促進のための取り組み、支援が必要であることが明らかとなった。 著者：星出てい子、本村美和、矢野聡子、吉良淳子、大仲功一、鈴木幸江、根本結佳、酒寄舞、後藤恵理子、藤崎亜希子、那須真弓、萩野谷浩美、市村久美子 担当部分：データの分析を担当した。
11. COVID-19禍の基礎看護学実習Ⅲにおける臨地・	共著	2023年3月	常磐看護学研究雑誌 第5巻 （ｐ23～34)	COVID-19禍で様々な制約を受けた2022年度実施の基礎看護学実習Ⅲを振り返り今後の実習における課題を明らかにした。従来の実習形態で臨地実習を実施できた群と臨地実習と学内実習を併用した群とを比較した結果、後者の方が「立案した援助を安全、安楽、自立を考えて実施できる」の目標の評価が高かった。臨地実習と学内実習を併用した場合であっても看護技術の原理、原則は学内実習で補うことができた結果と考えられた。 著者：細矢智子、山口幸恵、北島元治、萩野谷浩美 担当部分：論文推敲

(紀要論文)				
(辞書･翻訳書等)				
(報告書･会報等) 1. 人々の幸福を追及する、それぞれのアプローチ	共著	2011年4月	インターナショナルナーシング・レビュー 第34巻2号 (ｐ36～45)	越境とは、異なる学問と学問が歩み寄って新しい「学」を創り出すことである。学問を越境していくことで新しい学問体系の形成が起こるのではないかと考える。新しい「学」の構築に向けて、看護学と工学という異なるフィールドが互いに越境し合うことで見えてくる、人々の幸福へのアプローチについて議論を試みた。アプローチ方法は異なるが、看護学も工学も、「人間そのものをサポートしていく」、「個の幸せを追求し続ける」、「人々の生活に寄り添う」という点において、目指すべき方向性は一致している。看護学と工学が今後どのように越境していくのか？という問いに対して、お互いの得意な部分（強み）を理解し、それを互いに持ち寄り、形として発信していくことが必要なのではないかと考え記述した。 共著者：萩野谷浩美、本村美和、大島志織、新宮正弘 担当分担：インタビュー、考察［共同執筆につき、本人の担当部分の抽出は不可能］
(国際学会発表) 1. Changes in salivary amylase activity to mental calculation and footbath. 暗算および足浴での唾液αアミラーゼ活性の変化	共同	2009年7月	20th International Nursing Research Congress Focusing on Evidence Based Practice (Canada)	暗算と足浴を実施した際の唾液αアミラーゼ活性(sAA)の変化を測定して、ストレス評価の指標としてsAAが有用であるか否かを調べることを目的とした。健康な成人女性7名(27.9±8.7歳、21～47歳)を対象として、sAAの変化をストレス測定指標と考えられている心拍数、スキンコンダクタンス、Visual Analogue Scale の変化と比較検討した。その結果、暗算開始前と比較して開始後でいずれの測定項目も有意に上昇し($p<0.05$)、sAAと各測定項目との間に有意な相関があることも明らかとなった($rs=0.631$～0.798)。 sAAは、心拍数やスキンコンダクタンスなどの自律神経機能と同様に交感神経活動を反映しており、客観的にストレスを評価するための指標となりうると考えられた。 共著者：Haginoya, H., Saeki, Y. 担当分担：担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当し、ポスター発表した。

2. Relationship between expression of laughter and relieving stress in nurses 看護師の笑いの表出の程度とストレス緩和との関連	共同	2012年8月	12th International Congress of Behavioral Medicine (Hungary)	日常的にストレスが多い病院勤務の看護師[56名(33.7±9.0歳、男性13名、女性43名)]の笑い表出の程度とストレス緩和状態との関連を心理面と自律神経系の変化から明らかにすることを目的とし実験を行った。対象の笑いの程度を群分けすると、無表情群30名、微笑群13名、大笑い群13名であった。笑いの表出があった群では生理的な変化と心理的変化に矛盾はなかったが、笑いの表出がほとんどなかった無表情群では笑いを誘発する画像の視聴中でも交感神経活動が高いままであり、自覚的に気分が改善しても生理的にはストレス状態が持続しており、このような潜在的なストレスの蓄積は心身の健康に影響を及ぼすものと考えられる。 共著者：Saeki, Y., Kawaguchi, T., Haginoya, H., Hayashi, K. 担当分担：データ収集および分析を担当した。
3. Evaluation of stress in Patients with forced bedrest after undergoing cardiac catheterization 心臓カテーテル検査後に床上安静を強いられた患者のストレス評価	共同	2017年8月	2nd Nursing World Conjerence (Las Vegas)	心臓カテーテル検査を受けたあとの患者のストレスの程度を評価することを目的とした。心臓カテーテル検査が実施された患者9名(男性5名／女性4名、53～84歳)を対象に、検査前後の患者のストレスの程度を唾液αアミラーゼ活性(sAA)、心拍変動の周波数解析などの自律神経機能とVisual Analogue Scale(VAS)を用いて評価した。検査後のsAAおよび心拍変動の周波数解析から算出したLF/HFは、安静解除直前まで上昇傾向を示し安静解除後に有意に減少した。また安静解除後1時間のVASも、他の時点と比較して有意に低かった。これらの結果から、心臓カテーテル検査後に床上安静を強いられる患者は、安静解除直前まで交感神経活動が亢進した状態にあるが、安静解除後は交感神経活動も低下の一途をたどることが示された。また、主観的苦痛度も安静解除後に同様に軽減することが示された。 共著者：Haginoya, H,Saeki, Y. 担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当し、ポスター発表した。

4. The Process of Fostering a “Philosophy of Nursing” in Japanese Nursing Students 日本の看護学生における「看護観」育成のプロセス	共同	2020年7月	Sigma Theta Tau International Honor Society 31st International Nursing Research Congress （Canada）	日本の看護学生の看護観がどのように育成されているのか明らかにすることを目的とした研究である。研究の趣旨に賛同を得られた看護学生15名に半構成的インタビューを行い、修正版グランデッドセオリー法で分析した。看護学生は、《看護職への憧れや期待》を持ちながら入学し、未知の学問を学ぶ過程で《学習への戸惑い》を感じながら、実習により患者と向きあう体験をすることで、《看護とはなにか考える》なかで、患者に寄り添う、個別性を重視する、患者の持てる力を引き出す、家族への支援などについて考え、《看護を洞察する》《自己の言動を省察する》ことで《学習課題を見出す》ことを繰り返し、《看護のなかで大事にしていることに気付く》というプロセスを経ていた。学生は実習のなかで患者と対峙することで看護についてだけでなく自己についても洞察し、看護観が育成されるプロセスには学生自身の内面での成長が伴っていた。 共著者：Haginoya, H., Hidaka, K. Mori, C. 担当分担：担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当し、Webでポスター発表した。
（国内学会発表） 1. ストレス負荷に対する唾液αアミラーゼ活性の変化	共同	2008年9月	第7回日本看護技術学会（青森） 第7回日本看護技術学会学術集会講演抄録集	2つの異なるストレス(暗算と足浴)を負荷した時の唾液αアミラーゼ活性(sAA)の変化を調べることを目的とした。対象は健康な成人女性7名(27.9±8.7歳、21～47歳)であった。その結果、暗算開始後のsAA値は、暗算開始前および足浴開始前後と比べて有意な上昇がみられた。($p<0.05$) 共著者：萩野谷浩美、佐伯由香 担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を　主で担当し、ポスター発表した。

2. ストレス評価における唾液αアミラーゼ活性の有用性	共同	2009年8月	第17回看護人間工学部会研究会（茨城） 看護人間工学研究誌第10巻	ストレス評価に唾液αアミラーゼ活性(sAA)が有用であるか否かを調べることを目的とした。 健康な成人女性7名(27.9±8.7歳、21～47歳)を対象として、暗算と足浴を実施した際のsAAの変化を心拍数、スキンコンダクタンス、Visual Analogue Scale の変化と比較検討した。その結果、暗算開始前と比較して開始後でいずれの測定項目も有意に上昇し(p＜0.05)、sAAと各測定項目との間に有意な相関があることも明らかとなった(rs=0.631～0.798)。sAAは、心拍数やスキンコンダクタンスなどの自律神経機能と同様に交感神経活動を反映しており、客観的にストレスを評価するための指標となりうると考えられた。 共著者：萩野谷浩美、佐伯由香 担当分担：担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当し、ポスター発表した。
3. 心臓カテーテル検査・インターベンション施行後に6時間の安静臥床を強いられる患者の唾液αアミラーゼ活性を用いたストレス評価	共同	2009年9月	第8回日本看護技術学会（北海道） 第8回日本看護技術学会学術集会講演抄録集	大腿動脈・静脈を介して心臓カテーテル検査を受ける患者のストレスの程度を評価することを目的とした。 検査が実施された患者9名(男性5名／女性4名、53～84歳)を対象に、検査前後における患者のストレスの程度を唾液αアミラーゼ活性(sAA)、心拍変動の周波数解析などの自律神経機能とVisual Analogue Scale(VAS)を用いて評価した。検査後のsAAは、安静解除直前まで上昇傾向を示し安静解除後に有意に減少した。この変動は、心拍変動の周波数解析から算出したLF/HFの結果とも類似していた。安静解除後1時間のVASは、他の時点と比較して有意に低かった。これらの結果は、安静解除直前までは交感神経活動が亢進した状態にあり、安静解除に伴い交感神経活動が低下することを示している。また、患者の主観的苦痛度も安静解除後に軽減したことが示された。 共著者：萩野谷浩美、佐伯由香 担当分担：研究計画作成、データ収集、分析、論文執筆を主で担当し、ポスター発表した。 ［看護科学修士論文］

4. 看護職者の「笑い」表出とストレス緩和の関連性－心理指標および自律神経系の解析から－	共同	2011年10月	第10回日本看護技術学会（東京） 日本看護技術学会第10回学術集会講演抄録集 第10回日本看護技術学会大会賞　受賞	日常的にストレスが多い病院勤務の看護師[56名(33.7±9.0歳、男性13名、女性43名)]の笑い表出の程度とストレス緩和状態との関連を自律神経系の変化から明らかにすることを目的とした研究であった。3群で%HFに有意差はみられなかった。笑いの表出がほとんどなかった無表情群では笑いを誘発する画像の視聴中でも交感神経活動が高いままであり、自覚的に気分が改善しても生理的にはストレス状態が持続していた。 共著者：佐伯由香、川口孝康、萩野谷浩美、林啓子 担当分担：データ収集および分析を担当した。
(演奏会･展覧会等)				
(招待講演･基調講演)				
(受賞(学術賞等)) 1. 看護職者の「笑い」表出とストレス緩和の関連性－心理指標および自律神経系の解析から－	共同	2011年10月	第10回日本看護技術学会（東京） 日本看護技術学会第10回学術集会講演抄録集 第10回日本看護技術学会大会賞　受賞	日常的にストレスが多い病院勤務の看護師[56名(33.7±9.0歳、男性13名、女性43名)]の笑い表出の程度とストレス緩和状態との関連を自律神経系の変化から明らかにすることを目的とした研究であった。3群で%HFに有意差はみられなかった。笑いの表出がほとんどなかった無表情群では笑いを誘発する画像の視聴中でも交感神経活動が高いままであり、自覚的に気分が改善しても生理的にはストレス状態が持続していた。 共著者：佐伯由香、川口孝康、萩野谷浩美、林啓子 担当分担：データ収集および分析を担当した。

研　究　活　動　項　目

助成を受けた研究等の名称	代表,分担等の別	種　類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概　　要
(科学研究費採択) 1. 出産時の非医療的支援とWHOガイドラインの普及：実態調査と教材開発	分担	基盤研究(C)（一般）	2019年度～2022年度	独立行政法人 日本学術振興会	429万円	本研究は、WHOが発表したガイドライン（「ポジティブな出産体験のための分娩器ケア」）の日本での実施状況と日本の出産ケアの実態を探り、改善に役立つ教材を開発することを目的としている。
2. 臨床看護の質の向上を目的とした看護観形成のプロセスとその関連要因の探索	代表	基盤研究(C)（一般）	2021年度～2024年度	独立行政法人 日本学術振興会	351万円	看護師の「看護観」を構成する要素を明らかにするとともに看護観が形成されるプロセスとその関連要因を探索することを目的とした研究である。

（競争的研究助成費獲得（科研費除く）） 1. 心臓カテーテル法後の安静時間における看護介入に関する実態調査 －臥床安静に伴う苦痛の軽減を目指して－	代表	循環器疾患看護研究助成	2013年度	公益財団法人 循環器病研究振興財団	20万	本研究は、心臓カテーテル法後の安静時間における患者の苦痛を軽減するための看護介入方法を開発するための基礎的研究であった。各病院において心臓カテーテル法後に患者に対して看護師がどのような看護ケアを実施しているかを把握するための調査研究である。
（共同研究・受託研究受入れ）						
（奨学・指定寄付金受入れ）						
（学内課題研究（共同研究））						
（学内課題研究（各個研究））						
（知的財産（特許・実用新案等））						